

【氏名】 李 東俊

【所属】(助成決定時) 東北大学大学院 法学研究科

【研究題目】

東北アジア・デタントと朝鮮半島

【研究の目的】

冷戦史において一般に「デタント期」として知られる 1970 年代前半は、朝鮮半島分断の歴史にとっても重要な展開点であった。本研究の目的は、この 1970 年代前半における朝鮮半島分断構造の変化を、米中関係の文脈で分析し歴史的に捉え直すこと、言い換えれば、当時の朝鮮半島問題をめぐる国際政治上の諸争点を、米中関係を軸にして米韓及び中朝同盟と南北関係からなる、朝鮮半島を取り巻く三つの「関係の連鎖」の相互作用の中で考察することによって、分断構造の質的変容の過程を描き出すことである。

【研究の内容・方法】

米中和解のプロセスと朝鮮半島問題の展開との相互関係を分析する上で、本研究は、朝鮮半島分断構造に内在する二つの対決要因に注目した。その一つは、朝鮮半島における唯一合法政府という意味での「正統性」をめぐる問題である。米中和解と中国の国連復帰(中国と国連との和解)を機に、朝鮮戦争の際に中国とともに国連から「敵性団体」と規定された北朝鮮の法的・政治的地位の正常化問題が問われた。その際、それまで朝鮮半島における唯一合法性を韓国だけに与える根拠となっていた所謂「国連帽子」、即ち、それぞれ国連の朝鮮半島問題への政治的かつ軍事的介入を象徴する国連韓国統一復興委員会(UNCURK)と国連軍司令部(UNC)の解体問題が焦眉の課題となった。この国連の介在する正統性をめぐる競争は、南北双方にとって、統一への主導権争いであると同時に、自分と相手を相対化する過程であり、これは分断構造の性格を規定していた。

もう一つは、在韓米軍に象徴される「安全保障」をめぐる争点である。在韓米軍の駐留とその位置付けに対する共通理解は、米中和解における前提条件であった。米国は、少なくとも在韓米軍が中国を標的としていないことを中国に理解させる必要があったが、在韓米軍を対北抑止力として認識していた韓国にとって、在韓米軍の動揺は、国家存立の危機そのものを意味した。他方で北朝鮮は「南朝鮮革命」という戦略目標と自らの安保体制の強化を追求する上で、在韓米軍の撤退を執拗に迫った。こうした二つの争点をめぐる関連諸国間のせめぎ合いは、朝鮮半島をめぐるデタントの方向性を左右し、朝鮮半島の分断構造を不断に再定義しながら展開した。

【結論・考察】

この研究の意義は、第一に、米日中韓など関連諸国の政府文書・外交史料に基づいた実証検証を行うことで、これまでの冷戦史研究において余り注目されなかった米中和解と朝鮮半島問題との関連性を解明したところにある。つまり、従来主として台湾問題を中心とした二国間関係や米中ソ日など大国間の勢力構造の脈絡で説明されがちであったデタント期における米中関係の変

動を、朝鮮半島問題と関連付けて考察し、更に朝鮮半島レベルの動向を再考することで、朝鮮半島をめぐる国際政治の構造的変動を描き出した。

しかし、より重要な第二の意義として、この研究が朝鮮半島をめぐる国際政治の現象と構造を捉えるにあたり、新しい「視点」を提供した点を指摘したい。即ち、同研究は、当時の米中接近という地域的かつ世界的構造変動を視野に入れつつ、米中関係と米韓及び中朝同盟関係、南北関係などの「関係の連鎖」の中で朝鮮半島問題をめぐって展開された、協力と葛藤とが交錯するダイナミックな相互作用に分析の焦点をあわせた。こうした分析視点によってこの研究では、国際政治と国内政治との機械的な連携のみが強調されがちであった既存研究の限界を見直し、デタント期における朝鮮半島問題をより立体的に理解することができたと思う。

最後に、この研究は、デタント期における朝鮮半島をめぐる国際政治を朝鮮半島の長い分断史の中での「決定的分岐点」(critical juncture)として位置付けると同時に、従来主として国際冷戦の終焉に穿鑿し「冷戦期」と「冷戦後期」における朝鮮半島分断構造の違いに関心を寄せた研究傾向に修正を加えようとした。従来の研究では、社会主義圏の敗北によって世界レベルの冷戦は終息したのに、なぜ北朝鮮は生き残り朝鮮半島の対決構造には変わりがないのか、という根本質問に明確に答えられなかった。同研究における第三の意義は、この質問に対する手がかりを、デタント期における米中和解と朝鮮半島分断構造の変動から探るべきであると主張したところにある。